２．自然環境

（１）気象

気候については、基本的には比較的温暖で夏季に降水量の多い表日本型の気候で、標準的な東海型の気候区に属しますが、冬季には、いわゆる“鈴鹿おろし”とよばれる季節風の影響を大きく受け、高標高地の積雪量の多い寒冷な鈴鹿山脈の脊梁部まで含むため、平野部と山地の気候の差が大きい特徴を有しています。

亀山地域気象観測所における平成 18 年の年平均気温は 14.8℃、年間降水量は 1,846㎜となっています。

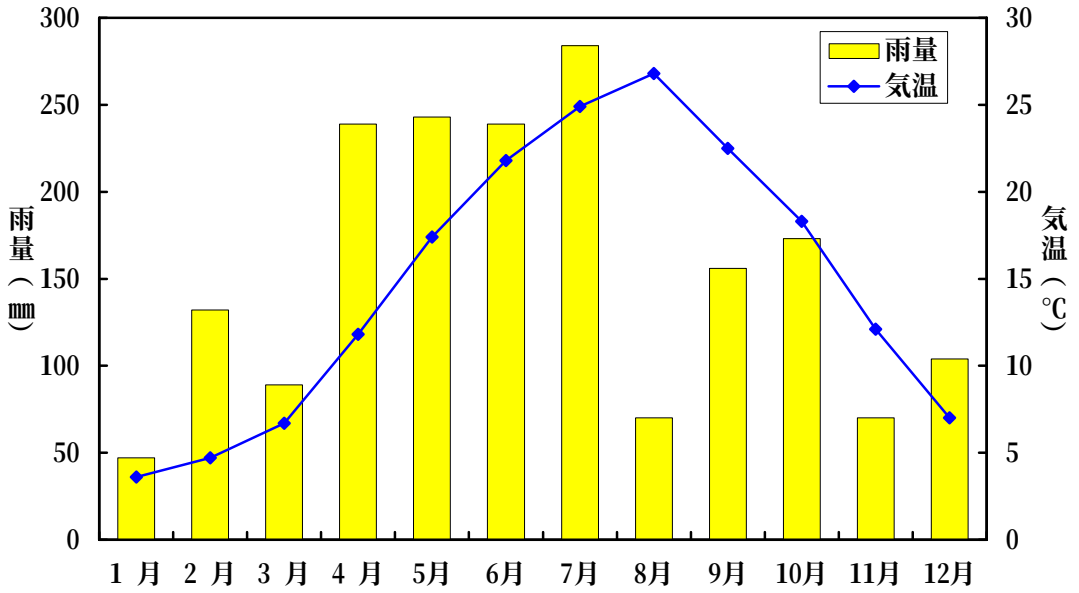
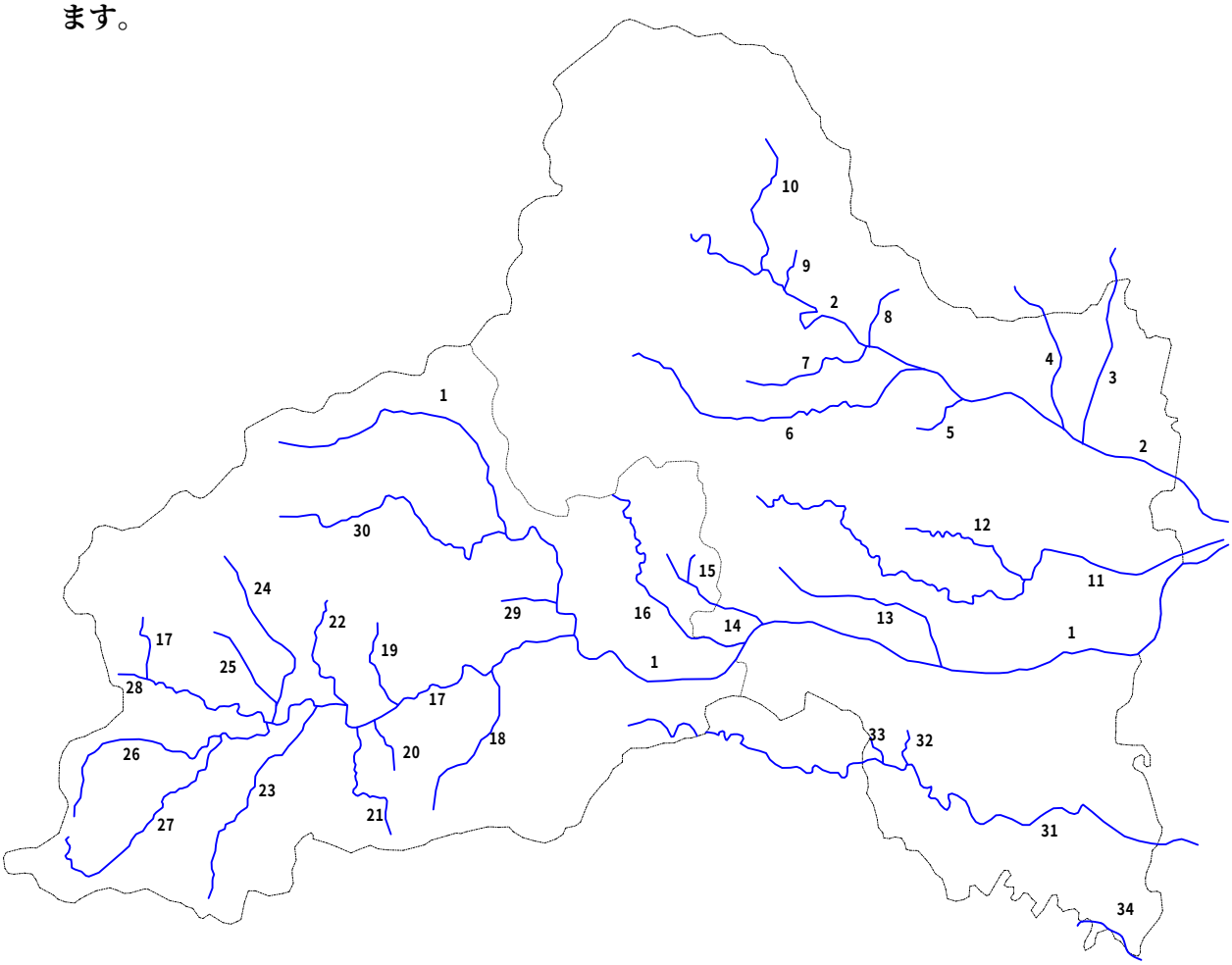


図２－１　亀山の気温と雨量（平成 18 年）

（２）河川

亀山市は、ほとんどが１級河川鈴鹿川の流域に含まれていますが、一部は２級河川の中ノ川流域及び志登茂川流域に属しています。これら河川は都市を構成する重要な要素であり、環境、景観、防災等において重要な位置と役割を有しています。

三重、滋賀両県境の高畑山麓に源を発する鈴鹿川は、加太川、椋川、安楽川などの支流とともに、山地、丘陵地、台地を浸食して本地域内を西から東へ貫流し、中・下流域に水田地帯を形成しています。また、中ノ川は関町萩原地内に源を発して東へ流れ、津市芸濃町から亀山市南部を流下したのち、鈴鹿市内を経て伊勢湾へと注いでいます。



凡		例		
1.鈴鹿川	8.我女川	15.石場川	22.虻谷川	29.市の瀬川
2.安楽川	9.水晶谷川	16.小野川	23.神武谷川	30.中津川
3.御幣川	10.宮川	17.加太川	24.出雲谷川	31.中ノ川
4.八島川	11.椋川	18.越川	25.吉ヶ谷川	32.洲美川
5.原田川	12.亀田川	19.牛谷川	26.喜和田川	33.西藤川
6.前田川	13.竜川	20.平子川	27.アマタノ川	34.前田川
7.大門川	14.桜川	21.小神武谷川	28.大岡寺川	

図２－２　亀山市及び周辺の主な河川（一級・二級河川）

（３）自然景観

亀山市は、鈴鹿山脈の南端部の南東に位置し、鈴鹿山脈の急峻な峰々や渓谷から、鈴鹿川、中ノ川周辺の平地まで、様々な景観がみられます。地形としては、仙ヶ岳から那須ヶ原山にかけての鈴鹿山脈の主稜線や、そこから東や南に張り出した野登山、明星ヶ岳、錫杖ヶ岳等に含まれる山地の風景、その山麓から東に続く庄内、亀山、鈴鹿、河芸等の丘陵地の風景、そしてこれら丘陵地の間を流れる安楽川、鈴鹿川、中ノ川の周囲に開けた平地の風景の３つに大きく分けられます。

仙ヶ岳は標高９６１ｍで鈴鹿山脈主稜線の南端付近に鎮座し、南側は花崗岩の絶壁とアカマツの生えたやせ尾根を残して深く浸食した渓谷の景観を呈しています。南西方向へは主稜線の高度を下げて鈴鹿峠へと続き、東へは吊り尾根状に大きくたわんだ仙鶏尾根を延ばし、標高８５１ｍの野登山へと続いています。鈴鹿山脈東側の急傾斜地には、一志断層が横切っており、独立した山塊の野登山には、山腹に風化した花崗岩が露出し、特異な景観を呈しています。また、尾根上の一部には鈴鹿山脈南部では少ないブナ林が見られます。野登山と仙ヶ岳は、晴天時には市街地や丘陵地の茶畑、安楽川や鈴鹿川の河川敷からも遠望できます。

安楽川は、鈴鹿山脈の山麓を深く浸食し、石水渓や白糸の滝といった数多くの滝や渓谷を形づくっています。

上流部に不動滝を持つ加太川付近は、周囲を山に囲まれた盆地となっており、鈴鹿川上流には渓流沿いに山地性丘陵地が分布しています。

市域中央部から南部にかけては、鈴鹿川に河川敷が開けた景観をみせ、中ノ川にかけて広がる鈴鹿丘陵や河芸丘陵には、水田と里山林が穏やかな景観をつくりだしています。

（４）地質

亀山地方の地質は、鈴鹿山地の成因から概観してみるとよくわかります。鈴鹿山脈は、主に石灰岩と輝緑凝灰岩で古生層を造っていますが、竜ヶ岳から南は中世代の終わりから第３紀の始めにかけて、一部古生層を貫いて花崗岩が入り込み、山脈の高所を造成しました。その後、これを覆っていた地層が削られて、白川地方から南、加太地方まで花崗岩の露出を見るようになりました。

野登山、仙ヶ岳を中心とする北部高地部は秩父古生層で、古生代に出来た古い地層です。主な岩石は粘板岩、泥板岩、砂岩および凝灰岩でこの高地から北は古生層の中に石灰岩が割り込み、花崗岩と接して白色結晶化し、鈴鹿市庄内地区に産出する石灰岩となっています。

白木町の明星ヶ岳、関町の富士山と観音山から東部一帯および本市の大部分は第３紀層で、今から１,５００万年～７,０００万年前までの地質時代にできたもので、砂岩、ツルト岩、礫岩、泥土岩から成りますが、礫岩は他の地層に挟まり、粘土岩は凝灰質で薄くなっています。

安楽川と小野川に挟まれた地域は、標高１００m内外の台地上で、小川、白木、鷲山より辺法寺、道野、住山、太田、椿世、田村、和田と徐々に低くなり井田川に至っています。また、この間を椋川が小規模な渓谷を成して中部台地と布気、野村、亀山（中心部）和田一連の台地とを分けています。

鈴鹿川以南は、錫杖ヶ岳より急落下する山岳地帯が低下して萩原、楠原、椋本より台地上となり、木下、山下、楠平尾、阿野田、菅内、田茂、安知本、三寺、中庄、下庄を経て、三宅、国府に至り、安濃川を境に洪積層が深く椋本付近まで延びています。中ノ川は、この台地を縦断し、ほぼ本市と芸濃町とを区分しています。

本市を構成する３つの台地群は、いずれも第３紀層で、その上を赤土層が覆っており、そのうち、河川で浸食された谷間は、基盤である水成粘板岩の分解でできた粘土質の土壌で覆われています。御幣川から東は、全く河川の浸食を受けない平らな台地が扇状に広がり、第４紀の沖積層伊勢平野に続いています。

花崗岩や花崗片麻岩を浸食して東流する安楽川は長石や石英の白い砂利を、鈴鹿山系の屏風岩を源流とする御幣川は秩父古生層を浸食した黒い砂利を南にそれぞれ運び、川崎の地で合流します。両河川の合流点は南部の第３紀赤土地帯と北部の黒土地帯との境界点でもあります。

奇岩、怪石で覆われた山、羽黒山。記念切手にもなりました。

（５）生物

亀山市では、平成８年度から４ヵ年をかけて、旧亀山地域で豊かな自然が育む多様な動植物の生息、生育の実態を調査しました。また、平成１５年度には、旧関地域において動植物の調査を実施しました。その結果、他の市町村では環境に適応できずに数が少なくなってしまった貴重な動植物も、亀山市の豊かな自然の中で数多く生息、生育していることが分かりました。以下にその調査結果の概要を示しました。

①　植物

植物相（生育している植物の種類）については、旧亀山地域において、シダ類以上の高等植物１４４科1，０７２種の生育が確認され、その中には数が減っている貴重な植物が３７科７６種含まれていました。各地域で確認された種の総数及び貴重な種の数は、野登山や仙ヶ岳など北西部の山地で６９８種及び５５種、中央から南部の平地・丘陵地で７３０種及び２８種、ため池で４５９種及び７種で、特に北西部の山地で貴重な種が多く確認されています。

旧関地域における現地調査による植物相の概要は、シダ植物１７科３３種、裸子植物３科３種、被子植物離弁花類５３科１６１種、被子植物合弁花類２１科７８種、単子葉植物１０科６３種、計１０４科３３８種でした。鳥獣保護区では１４１種、自然公園では１２０種、水辺（河川）では９４種、広葉樹林では１２７種、針葉樹林では１０９種の植物種が確認されました。鳥獣保護区や自然公園ではシダ植物が多く確認され、広葉樹林や針葉樹林ではトウゴクサバノオ、スズカカンアオイ、ミカエリソウ、シュンランなどが林床に生育していたことが特徴的です。水辺（河川）は、河川敷にカラシナ、ナズナ、イヌガラシなどのアブラナ科の植物が多く生育しており、また、アリタソウ、オオニシキソウ、メマツヨイグサ、アレチハナガサ等の外来種も見られました。注目すべき種は、トウゴクサバノオ、スズカカンアオイ、イワカガミ、ミカエリソウ、タニウツギ、スズカアザミ、ショウジョウバカマ、シュンランの８種が確認されました。

植生（生育している植物の集団）については、スギ・ヒノキ植林が最も広い面積を占め、カシ林は北西部の山地の山腹から頂上にかけて、コナラ林は丘陵地から山腹にかけてそれぞれ広く分布し、アカマツ林は石水渓周辺や安楽川北側や南東部の丘陵地に点在しています。

野登山山頂付近のブナ林、同じく野登山南斜面のモミ林及び仙ヶ岳頂上付近のアセビ、コアブラツツジなどの自然低木林がそれぞれ貴重な植物群落としてあげられ、特に野登山のブナ林は、県の天然記念物に指定されています。

＜ササユリ＞

山地に生える多年生草本。本州（中部以南）、四国、九州に分布。稀少種、景観構成に主要な種として、鈴鹿国定公園の指定植物に選定されています。また、「三重県レッドデータブック２００５」にも掲載されています。

＜シライトソウ＞

山地の木の陰に生える多年生草本。本州（関東地方、新潟県以西）、四国、九州に分布。稀少種、景観構成に主要な種として、鈴鹿国定公園の指定植物に選定されています。また、「自然のレッドデータブック・三重」にも掲載されています。

＜シュンラン＞

山林や低山地の乾燥した土地に多い常緑多年生草本。北海道（奥尻島）、本州、四国、九州に分布。景観構成に主要な種として、鈴鹿国定公園の指定植物に選定されています。

＜コクラン＞

関東から西の林下の湿った所に生える多年生草本。本州（東海道、近畿地方以西）、四国、九州に分布。稀少種として、鈴鹿国定公園の指定植物に選定されています。

＜トウゴクサバノオ＞

山地の沢沿いなど、やや湿ったところに生える多年草。全体に無毛で、花は淡黄白色で花弁のように見えるのは萼片で、内側の黄色い部分が花弁。トウゴク（東国）とは関東地方に多く、サバノオとは果実を２個つけた形がサバの尾に似ていることからこの名があるといわれています。
現在「三重県レッドデータブック２００５」に掲載されています。

＜スズカカンアオイ＞

　葉には水滴状の斑紋があることが多く、卵形～広卵形で、基部は心形。葉柄は長く、紫色を帯びます。このアオイはギフチョウの幼虫の食草となっています。

＜イワカガミ＞

　北海道から九州の高山帯から亜高山帯にかけて生育する多年生の草本。岩場や急傾斜地などに群生します。葉は丸く、光沢があり、花は主に淡紅色で、先端は細かく裂けています。イワカガミの名は、岩場に生えることと、光沢のある葉を鏡に見立てていることに由来しています。

＜ミカエリソウ＞

　別名をイトカケソウ（糸掛草）とも言う中部地方以西の山地の林床に群生する落葉小高木。茎の先端に長さ７～１５㎝の細長い花穂が立ち、筒状のくちびる形の花が３個ずつ対生して密につきます。自生地では群生している場合が多く、開花期は大変に美しい景観を呈するので、思わず見返ることから命名されたと言われています。

＜タニウツギ＞

　スイカズラ科の落葉低木。渓流沿いや谷間に多く自生する。開花時期は田植えの時期と同じ４～５月で、別名タウエバナとも呼ばれ、枝垂れるように淡紅色の花をつけます。若芽は食用にでき、材は堅く木釘や楊枝にも使われます。ただし、「卯の花」の名で知られる本来のウツギはユキノシタ科の植物でこれとは全くの別物です。

＜スズカアザミ＞

東海地方、近畿地方に分布するアザミで高さ１～１．５m程。頭花は紅紫色でやや穂状に、上向きまたはやや斜め上向きにつき、花冠は長さ１４～２０㎜、直径は１６～２３㎜です。茎葉は羽状に深く裂けるのが普通で、基部は茎を抱くものと抱かないものがあります。

＜ショウジョウバカマ＞

谷筋や山野の湿った所に生える草丈１０～２５㎝の多年草。花は淡紅～淡紫色で、茎先にかたまって付く。雪の多い地域では湿った落葉樹林下に生え、雪が解けたばかりの斜面に咲いていることもあります。名の由来は、花を猩々（しょうじょう；中国の伝説の動物）の赤い顔に、葉の重なりを袴に見立てたものと言われています。

＜野登山のブナ林＞

野登山のブナ林は、山頂の鶏足山野登寺の境内林です。野登寺は、醍醐天皇の御代に勅願所として建立されたと伝えられる由緒ある寺で、ブナ林は本堂に向って右側の山頂より蛇谷の傾斜地にかけ約４ha にわたって壮大な原始林を形成しています。ブナは、我が国特産の落葉喬木で本州・九州の深山に自生します。野登山のブナは樹幹が直立し、高さ約２０m、直径約１．４mにも成長したものもあります。樹皮は滑らかで赤黒色、外面は灰色を帯び、葉は楕円形でふちに細かく浅い切り込みがあります。５月頃には薄緑色の花を開き、殻に包まれた実を結びます。材質は堅く、建築・器具・船舶・薪炭・下駄の歯などに利用され、果実は食用にもなります。

② 動物

旧亀山地域では、哺乳類については、カモシカやニホンザル、カワネズミなど１８種が確認されました。特に北西部の山地では、国の特別天然記念物に指定されているカモシカをはじめ、ニホンザルやキツネ、ニホンジカなど１６種が含まれてお

り、この一帯に豊かな自然が残されていることを示しています。

鳥類については、コマドリやキビタキなど１０５種が確認されました。地域別の内訳では、北西部の山地で６２種、里山丘陵地を含む平地で７０種、ため池で４８種がそれぞれ確認され、渡りの区分では留鳥が最も多く、次いで夏鳥、冬鳥の順でした。野登山周辺のブナ林など自然度の高い植生を反映して、北西部の山地では深い森林を好むアオゲラ、オオルリ、サンコウチョウ等が確認されており、森林環境が良好なことを示しています。生息数の少ない貴重な鳥類としては、オオタカ、ハイタカ、クマタカなどの猛禽類、ひらけた河原などにみられるコアジサシ、森林を好むサンコウチョウなど１１種が確認されました。

両生類については、渓流、ため池、湿地、水田、用水路など生息しやすい環境が数多くあり、水田地帯でよくみられるニホンアカガエル、トノサマガエル、シュレーゲルアオガエルや、山地に生息するカジカガエル、ブチサンショウウオ、ヒダサンショウウオなど比較的多種類の両生類が生息しており、全体で１７種、地域別では、山地で１４種、里山丘陵地を含む平地で１０種の両生類が確認されました。貴重な両生類としては、カスミサンショウウオ、ブチサンショウウオ、ヒダサンショウウオ、モリアオガエルの４種が確認されました。また、爬虫類では、イシガメ、シマヘビ、ヤマカガシなど１１種が確認されました。

魚類については、河川・ため池においてヤマトイワナやカジカなど３５種が確認されました。地域別の内訳は、安楽川で２９種、鈴鹿川で１０種、中ノ川で１３種、ため池で１０種で、安楽川での種類の多さが目立ちます。安楽川に多種類の淡水魚が生息しているのは、水質が良好で川の上流から中流、下流にかけて様々な水辺環境が形成されているためと考えられます。貴重な魚類としては６種があげられ、特に安楽川では国の天然記念物に指定されているネコギギが確認されています。

昆虫類については、目視観察、捕獲、鳴き声等により２，１８８種が確認、採集され、そのうち数の少ない貴重な昆虫は２２種ありました。特に野登山や仙ヶ岳の鈴鹿山脈の高い標高地を含む地域では、暖地性の種から冷温帯に分布する種まで様々な要素から成る多くの種類がみられ、貴重な昆虫２２種のうち、オオセンチコガネ、キリシマミドリシジミ、ルリボシヤンマ、エゾゼミなどの１０種がこの地域で確認されています。

旧関地域では、哺乳類については、６目８科１１種が確認され、ヒミズやノウサギ、テン、ニホンジカといった里山から樹林地に生息する種が、足跡や糞などのフィールドサインから確認されました。

鳥類については、１１目２７科５０種が確認されました。特に、鳥獣保護区のような禁猟場所や水辺（河川）において多く確認されました。植生が単調である針葉樹林では１２種であり、鳥獣保護区の２８種や水辺（河川）の２７種と比較して半分以下の確認種数でした。

水辺で確認された鳥類は、河川の中流域ではアオサギのほか、ハクセキレイなど

のセキレイ科が多く見られ、さらに上流の渓流ではヤマセミやカワガラスといった種も確認されました。また、関町の多くが樹林地であることから、樹林地を生息場所とする鳥類は、ヤマドリといった大型の鳥類からアオゲラやコゲラといったキツツキ科、エナガやヤマガラといった混群をつくる小鳥など数多く確認されました。今回の調査で確認された注目すべき種はオシドリ、ヤマドリ、ヤマセミ、カワセミの４種でした。

オシドリ

カワセミ

爬虫類については、２目２科６種、両生類については１目２科５種が確認されました。調査ではアカミミガメやウシガエルも確認されましたが、これらは近年都市近郊で分布を広げている外来種です。

魚類については、３目６科１０種が確認されました。主にタカハヤ、カワムツ、ドジョウ、シマドジョウ等が確認されていますが、ため池ではオオクチバスやブルーギルといった外来魚も確認されました。

昆虫類については、１１目７２科１１７種が確認されました。確認種数が最も多かったのは水辺（河川）の地点で、水辺、草地、河原など環境が多様であることから、水生昆虫をはじめとしてバッタ目、カメムシ目、コウチュウ目など４９種が確認されました。これに対してスギやヒノキなどの植林地では２２種と最も少ない結果となりました。

＜カモシカ＞

本州・四国・九州に分布する日本固有種で、国の特別天然記念物に指定されています。肩高７０～７５㎝、頭胴長７０～８５㎝。成獣の角長は約１３㎝で性差はなく、四肢は太くて短く、側蹄が発達しています。全身白色または灰色で、灰褐色の長い体毛に覆われ、眼窩前下部に大きな臭腺をもっています。

低山帯から亜高山帯にかけてのブナ、ミズナラ等が優占する落葉広葉樹林や針広混合林に多く生息します。各種木本類や草本、ササ類などを採食し、反芻胃をもち、タメ糞をする習性があります。単独で生活することが多く、土地への定着性は高く、雌雄とも１年を通じて個体なわばりを形成します。

＜オオタカ＞

全長雄約５０㎝、雌約６０㎝、成長では体の上面は暗青灰色で、尾には黒色の横帯が３～４本あります。低地から山地の林に生息し、農耕地や市街地に出現することもあります。秋冬には低標高地に移動する個体もあります。数回やや早く羽ばたき、短い滑翔を交えて直線的に飛ぶが、帆翔もよく行います。獲物は鳥類が多く、ヤマドリ、キジ、カモ類、シギ類、キジバトなどを捕らえます。

アカマツ、モミなどの高木の枝上に、枯れ枝を使って直径７５～９０㎝の皿型の巣を作り、普通３～４卵を産み、抱卵日数は約３５～４１日、育雛期間は３５～４０日です。巣立ちは本州中部では６月中旬～７月上旬です。

本種は個体数が少ないうえ、剥製などを目的とした密猟や、開発による繁殖適地の減少などが心配され、種の保存法による指定及びレッドデータブック絶滅危惧Ⅱ類種の指定を受けています。低山帯の森林の生態系の頂点に位置しているため生態系全体の保護が必要とされます。

＜サンコウチョウ＞

東南アジアから夏鳥として本州以南に渡来し繁殖する鳥です。

全長は雄で約４４．５㎝、雌で約１７．５㎝、雄は頭部と胸は紫黒色、後頭の短い冠羽、長く伸びる中央尾羽が特徴的で、目の周囲はコバルト色をしています。

主として平地から低山の林に棲み、樹冠部や林内の空間で昆虫やクモを捕っています。チーチョホイ、ホイ、ホイ、ホイと口笛のような声でさえずり、ツキ（月）、ヒ（日）、ホシ（星）と聞こえるところから三光鳥と名づけられた、姿、声の美しい鳥です。地上１．５～５ｍの細い枝のまたに樹皮でコップ形の巣を作り、３～５個の卵を産み、抱卵期間は１２～１４日、巣立ちまでの日数は１０日ほどです。

＜モリアオガエル＞

モリアオガエル卵塊

東南アジアの熱帯を中心に分布するアオガエル科の中で最も北方に分布するアオガエルで、樹上性の日本特産種です。体長は雄で５７㎜、雌で７２㎜程度で、雌の方が著しく大きい特徴があります。神奈川、茨城県を除く本州と佐渡に分布が知られ、主として山地帯の森林に生息します。

繁殖期は５～７月頃で、同一地点でもかなり長く継続し、繁殖場所は森林内の池や湿地、林縁の水田などで、主に止水上に張り出した植物の枝先に卵泡をつくり産卵します。産卵の際には性比に偏りがみられ、多くは一雌複雄です。孵化した幼生は下にある止水に落下して、そこで生活し、７～９月に変態上陸し、仔蛙は主として林内の多湿な場所の大型草本の葉上等でみられます。非繁殖期には草本や広葉樹の枝上で生活し、樹上性の直翅類等の昆虫やクモ類を食べます。

＜カワバタモロコ＞

全長３～６㎝の小型魚で、ヒナモロコに似ていますが、体高がやや高く、腹鰭より後方の腹部が側扁して竜骨状になっていること、産卵期の雄が鮮やかな黄金色を呈することで区別できます。日本固有種で、中部地方以西の本州・四国の瀬戸内海側及び九州北西部に分布しており、平野部の浅い池沼、ため池、小川などに棲み、少数で群れをつくって表層付近を遊泳し、雑食性で付着藻類や水生小動物などを幅広く食べます。生息域が平野部であるため、生息地やその周辺の開発、水質の悪化、さらにオオクチバス、ブルーギルなど魚食性の外来種の影響で減少するものと考えられています。現在「三重県レッドデータブック２００５」に掲載されています。

＜ホトケドジョウ＞

全長約６㎝で、体は円筒形で太短い形で、頭は平らになっています。体色は肌色で全体に黒点をちりばめます。口ひげは４対あり、その内の一対が鼻孔より上へ角のように出ています。

生息域は湿地帯を流れる細流や湧水等、清らかで冷たく、流れのゆるやかな砂泥底で、水草や石など

障害物のあるところを好む日本固有種で、レッドデータブック絶滅危惧ＩＢ類に指定されています。水草などの間をゆっくりと泳いでいることが多く、水底をはっていることが少ないドジョウです。青森県を除く東北地方から三重・京都・兵庫にかけて分布し、斑紋や腹鰭の位置、脊椎骨数などに地理的変異が認められます。雑食性で産卵期は３～６月で、水草などに卵を産みつけます。

＜ネコギギ＞

全長約１５㎝で､伊勢湾及び三河湾に注ぐ河川の中流域にのみ分布する日本の固有種です。最も小さなギギの一種で、７～８㎝で成熟します。頭部は丸く、尾鰭後縁の切れ込みは浅く、ずんぐりしており、比較的大きな眼をしています。

夜行性で、緩やかな流れの浮き石の下や岸辺のヨシ場などの隙間を中心に生息し、川底近くをゆっくりと遊泳し、大きな淵では群泳することもあります。主に底生動物、特に水生昆虫を食べ、産卵期は６～７月頃で、なわばり行動はあまり示しません。

河川改修における護岸のコンクリート直線化による生息環境の消失などのため、近年、個体数の減少が著しく、１９７７年に国の天然記念物に指定されています。

＜メダカ＞

全長約４㎝の小型魚で､カダヤシに似ていますが､尾鰭がより角ばっており、尻鰭も広く、上から見ると背が黒褐色で目立ちます。雄の尻鰭は大きくて平行四辺形ですが、雌では幅が狭く三角形に近い形をしています。本州以南、琉球列島まで分布し、平地の湖沼や水田、用水、河川下流の流れの緩やかなところに生息し、昼行性で岸辺に近いところで、水面付近を群泳します。動物プランクトンや植物プランクトンの他、小さな落下昆虫などを食べる雑食性です。産卵期は４～８月で、メスは卵をぶら下げながら泳ぎ、水草に付着させます。卵からふ化した稚魚は成長が早く約半年で成熟します。ペットショップなどで売られているオレンジ色の「ヒメダカ」は品種改良品です。

メダカは各地で五千以上の愛称があるといわれ、人間に非常に身近な存在でした。かつては平野部の池沼、水田の水路、小川など、流れのゆるやかなところに群泳する姿がよくみられましたが、水路改修などによる生息場所の減少や水質汚染、移入されたカダヤシとの競争などによって分布域は狭くなり、近年減少しており、１９９９年環境庁レッドデータブックの絶滅の恐れがある種（絶滅危惧Ⅱ類）に新たにあげられています。

＜オオセンチコガネ＞

体長１６～２２㎜で、センチコガネに似ていますが、頭楯は長めで台形で、前胸背板中央の縦溝は長く、中央前方に達します。赤紫から緑、青などの強い金属光沢があり、地方に特有の変異があります。動物の糞や死骸に集まります。

北海道、本州、四国、九州、対馬、屋久島及び朝鮮半島、シベリア東部に分布し、鈴鹿山脈に分布する地域個体群はミドリセンチコガネと称される金緑色を呈する個体群ですが、県南部ではルリセンチコガネと呼ばれる青紫色を呈する個体群を産します。

＜キリシマミドリシジミ＞

ヒマラヤ南面からミャンマー北部、中国南部を経て日本まで、アジアの照葉樹林に広く分布するミドリシジミで、日本は分布東北限になっていなす。本州、四国、九州、隠岐、対馬、屋久島に分布し、暖流に沿った降水量の多い地域の暖温帯の常緑広葉樹林に生息します。主要な食樹はアカガシですが、ウラジロガシが食樹となっている場合も多くあります。卵で越冬し、年１回、７月中旬～８月に成虫が出現します。

＜ルリボシヤンマ＞

複眼の大きい、黒褐色の地に黄緑色と瑠璃色の小斑を散りばめた大きなヤンマで、雌雄ほぼ同じ大きさで、体長は約６０㎜です。日本、サハリン、朝鮮半島北部から中国北東部、シベリアを経てヨーロッパまでとカムチャッカからアラスカ、カナダ、アメリカ北部に至る高緯度地方に広く分布しています。国内では北海道、本州、四国と利尻、佐渡、対馬等の離島に分布しますが、近畿以西では産地が著しく局地化して希となります。主に寒冷な湿地や泥炭地の比較的浅くて小さい池沼等に棲み、成虫は夏に出現し、秋までみられます。現在「三重県レッドデータブック２００５」に掲載されています。

＜エゾゼミ＞

雄３９～４４㎜、雌３８～４１㎜で、体は黒色で赤褐色と黄褐色の斑紋があります。北海道、本州、四国、九州及び朝鮮半島に分布し、東北日本では平地の、関東

以西では５００～１０００mの山地のマツ林やスギ・ヒノキ林に多く生息します。７月下旬～９月上旬に出現し、幹に下向きに止まってギィーと連続音で鳴きます。現在「三重県レッドデータブック２００５」にも掲載されています。

（６）亀山里山公園

近年、亀山では里山や耕地の荒廃が急速に進行し、多くの動植物が身近に見られなくなるなど、自然環境が急激に変貌しつつあります。そこで、亀山市では、市内の荒廃地を活用し、市民のふるさととの出会いの場として、本市固有の自然環境を再生することにより、「生きとし生けるもの」とのふれ合いと体験を通じて環境意識の更なる高揚を図ることを目的として、平成１６・１７年度の２ヶ年をかけて面積およそ 3.5ha の亀山里山公園を整備しました。

①　植生

亀山里山公園は、丘陵地の端に位置する南北方向の谷間です。東部及び西部の上部は畑地や住宅地となっており、中央の谷底部分は、池を中心にした水辺環境が広範囲を占めています。

池では、ガマ群落、ヒメガマ群落の形成やヤナギ類の生育がみられ、その下層には、ミゾソバ、セリが繁茂しています。小さな池では、イグサ、カンガレイ、クサヨシなどの抽水植物がみられます。また、やや湿った所や小川付近、ヤナギ類の下層には、イグサ、イボクサ、ミゾソバ、セリ、コウガイゼキショウなどの水田雑草が繁茂しています。

山林は、コナラ、ヤマザクラ、ヤマハゼ、シロダモ、アラカシなどの二次林やスギ植林などであり、いわゆる里山林となっています。

春季には、林縁に植栽されたランの開花がみられると同時に、セリ等の白い花が目立つようになり、イやヨシ等の緑と白の綺麗なコントラストができあがります。

夏が近づくにつれて、園内のショウブやアヤメも開花し、黄色、白色や紫の花を観賞することができます。スイレンの黄色い花が開花をはじめる頃には、木本ではフジ、アケビ、アジサイやネムノキ、草本ではオオイヌタデ、ヘビイチゴ、キツネノボタン、ドクダミ等が開花し、賑やかな彩りとなってきます。秋が近づくにつれて、ミゾソバ群落がピンク色に色づき、畦に沿ってヒガンバナの赤色が広がり、一面華やかな雰囲気となってきます。ヤナギ類の穂も風にのって飛ぶ頃になると、紅葉もすすみ、園内に多くみられるヤ

マハゼが朱色に染まり、林縁にはコナラやアラカシのドングリが散乱し、水辺にはジュズダマがたわわに実り、カラスウリのオレンジ色の実が目立つようになります。水辺の草本は枯れ始め、ガマやヒメガマの穂が懐かしさをかもし出す様に秋を演出してくれます。

冬になると、園内一面の草本は枯れ、湿地性の高茎草本であるヨシやガマが枯れた状態で風に吹かれるようになります。

② 動物

園内は、山林に囲まれた湿地や小川などの水辺環境となっているため、園内やその周辺に生息している動物の餌場や繁殖場所として利用されています。

水辺では、メダカ、ザリガニ、スジエビ、ウシガエル（幼生）、トンボ類のヤゴなどが多く観察されます。生息する魚類の種類は少なく、メダカ、カワバタモロコ、ギンブナ、ドジョウが確認できますが、メダカやカワバタモロコについては、特定の場所で個体数が多く生育しています。ザリガニやスジエビについては、園内全域でみられ、飛来してくるサギ類、カラスなどの餌となっているようです。

山林や林縁部では、シジュウカラ、メジロ、ヤマガラ、ホオジロなどが頻繁に出現し、ヤナギ類やガマ等の穂などを伝って、園内を移動している様子が観察されます。また、コジュケイやキジも生息しており、春から夏にかけては鳴き声が頻繁に聞こえてきます。

春先から夏にかけては、ヨシやガマの群落を利用して、カルガモやバンが繁殖している様子や、コゲラのドラミングが聞こえてきます。水深の浅いところでは、ニホンアカガエル、ツチガエル、ヌマガエル、ウシガエルの幼生を観察できます。園内の奥にある池では、ザリガニの個体数も少なく、メダカが群をなして泳いでいる様子や、ギンヤンマが餌を求めて水面を飛翔している様子が観察できます。また、山林には、クリやコナラの樹木が多く、樹液を求めて、カブトムシやクワガタも多く集ってきます。

秋頃からは、越冬するウシガエルやツチガエルの幼生、カマキリ、カナヘビが多く観察できるようになります。また、来園者の少なくなるこの時期になると、餌を求めて水辺を移動しているイタチが頻繁に出現するようになり、カワセミも朝夕に飛来するようになります。

冬になると、水辺に生息している生き物は冬眠に入り、放流したコイがゆっくりと泳いでいるのが見られる程度になりますが、メジロやシジュウカラの混群が頻繁にヤナギの枝に止まるようになり、鳥の囀りが賑やかになってきます。また、カモ類が飛来し、池の水面を泳いでいるのが観察できます。